

經濟叢論 每月一日發行
第一號 昭和十四年七月一日發行
第二號 昭和十四年八月一日發行
第三號 昭和十四年九月一日發行
第四號 昭和十四年十月一日發行
第五號 昭和十四年十一月一日發行
第六號 昭和十四年十二月一日發行

京都市帝國大學經濟學會

經濟叢論

第十四卷 第一號

昭和十四年七月

京都帝國大學經濟學部創立二十年記念論集

田島・戸田・神戸・小川・河上・河田・山本・作田の前八教授肖像
記念展覽會及講演會寫眞

國家の社會的構成……

完全豫見の問題……

時局下に於ける農業計畫生産……

世界經濟の動向……

小工業の特質と其の助成方針……

ナチスの經營共同體の理論及び構造に就て……

徳川時代の經濟統制……

信用理論と其の經濟的基礎……

企業聯繫としての再保險……

マックス・ウェーバーの國民主義……

ロバートソンの物價變動理論……

中小工業と市場……

沒價値性理論の成立……

政策學としての日本經濟學……

日本經濟學の根本原理……

經濟學部二十年を回顧して……

經濟學部創立二十年記念經濟學會大會記事

彙報

外國雜誌論題

(禁轉載)

法學博士 河田 嗣郎

文學博士 高田 保馬

經濟學博士 八木芳之助

經濟學博士 柴田 敬

經濟學士 大塚 一朗

經濟學士 中川 興之助

經濟學士 堀江 保藏

經濟學士 中谷 實

經濟學士 佐波 宣平

經濟學士 白杉 庄一郎

經濟學士 青山 秀夫

經濟學士 田 杉 競

經濟學士 出口 勇藏

經濟學博士 谷口 吉彦

經濟學博士 石川 興二

經濟學博士 本庄 榮治郎

中小工業と市場

中小工業の存立條件に關する一考察

田 杉 競

一

技術的生産費の考察のみよりすれば、多くの産業部門に於て中小工業は大工業と競争する力を持たない。即ち平均生産費曲線と限界生産費曲線との交點、即ち最小生産費の高さは一般に大工業の方が低い。之大工業が大規模生産の利益によつて低廉なる生産を行ひ得るからであり、従つて大企業が益々その規模を擴張すれば小企業の存立し得る餘地なきこととなる。現實に見る中小工業の存在は何によつて説明さるべきか。マーシャル、ロビンソン、フローレンス¹⁾等の研究の中心の一は茲にある。この場合大企業と中小企業とが同一産業において競争關係に立つてゐるか否かを注意せねばならぬのであるが、大企業と中小企業との競争は同一産業部門内にある如く見えて、嚴密にいへば兩者が異なる産業に屬することが多い²⁾。又大規模生産の利益は之を總括的に見るだけでなく、之を構成する要素に分析して考察する必要がある。その中には合理的要素の外に、非合理的要素の影響する場合もあり、その作用力も一樣でないからである。

- 1) Marshall, A., Principles of economics; Robinson, E. A. G., The structure of competitive industry, 1931; Florence, P. S., The Logic of industrial organization, 1933.
- 2) 如何なる程度の差異あるとき別個の商品と見、別個の産業に屬すと見るべきか、困難なる問題であるが (Robinson, *ibid.*, p. 6-13.)、若し嚴密にいへば

企業の規模を決定する種々なる要素については、昔て中小工業に關聯して論じたことがあるが、³⁾その中、市場的要素は特に再検討する價值があると考へられる。商業資本に依存する問屋制工業にせよ、⁴⁾工業資本に依存する下請制工業にせよ、對市場活動の主要なる部分は之を他の助力に仰いで居り、このことが中小工業の存立に大なる意義をもつてゐるからである。

大工業の發展には交通の發達に基く大市場の成立がその条件の一たること今更説く迄もない。かくの如き大市場が一般には既に成立してゐると見られるが、中小工業はかくの如き市場の上に立つて營業してゐるのか。之を知るためには中小工業の對象となる需要は如何なる種類のものであるか。先づ第一に之を考察する必要がある。若し中小工業の市場が大工業によつて侵略され得るときには、市場の確保は中小工業にとつて極めて重要な問題である。中小工業の商業的機能における依存關係が之から説明されるであらう。第二に論ぜんとする問題は之である。かくて中小工業の存立の條件と態様とにつき若干の考察を行ふことは中小工業の將來を卜する一つの手掛りを與へることになるであらう。

二

企業の規模を決定する要素は凡そ五つに分ち得る。即ち第一は生産技術的要素 (technical forces)、第二は工場經營上の要素 (managerial forces)、⁵⁾第三は金融的要素 (financial forces)、⁶⁾第四は市場的要素 (influences of marketing)、⁷⁾第五は危険及び變動に關する要素 (forces of risk and fluctuation) であつて、⁸⁾一般的に言へば、第一、第三及び第四の要素よりして、又第五の要素も之に加はつて大規模企業を有利とする場合が多く、之に反し大規模化に對して制限

商品を細分して研究することが適當と考へられる。

3) 拙稿、中小工業問題としての下請制工業(經濟論叢、第47卷第6號)其他。
4) 小宮山琢二、日本中小工業の存立形態(一橋論叢、第2卷第5號)參照。
5) Robinson, *ibid.*

的作用を有するのは第二の要素と時によつて第五の要素である。然るに我國に於て中小工業存立の餘地が比較的大なるは第一の生産技術的要素中、低勞賃といふ事實に負ふところ最も大である。勿論、低勞賃については個々の具體の場合につき検討する要があり、例へば低勞賃といふも不熟練勞働に於ける低廉（實質的には必ずしも低廉でない）か、熟練勞働に於ける低廉か、或は又、個々の中小工業の生産費中、勞賃の占むる割合は幾何であるか、等の點につき問題があるが、一般的に見て低勞賃の中小工業に有する意義は殆ど疑ふべくもない。

市場に關する要素は一般的には大規模化の方向に作用する。即ち主として大量仕入及び大量販賣の利益から大規模企業を有利とするのである。²⁾然し乍ら現實に企業が活動し、營業の地盤とせる市場は完全なる競争の行はる市場でもなく、又合理的な需要のみの出合ふ市場でもない。こゝに中小工業の存立し得る餘地が與へられる。

中小工業は特殊の需要の上に存立を續けてゐる場合が多いのである。以下この點を少しく考へて見よう。

市場といへば勞働市場・金融市場・原料品市場及び製品市場等を考へ得るが、こゝに論ぜんとするのは原料品市場及び製品市場、就中後者についてである。生産が需要に適應するの否か、需要が生産に追隨するの否か、長き期間について見る限り困難なる問題⁴⁾であつて、屢々生産者の創意が需要者の欲望を指導する場合も見られるが、一般には、又直接には需要を無視して生産計畫を立てることは出來ない。獨逸に於ける合理化が殆ど失敗に終つたのは、需要を無視し、又は需要層の開拓を樂觀し過ぎたことに因るところが多い。⁵⁾かくの如くして需要の性質は生産の規模を決定する上に大なる意義をもち、需要によつては、即ち商品によつては大規模生産を不可能又は不利とする場合がある。第一に需要の分化及び商品市場の狹隘、第二に需要の不安定性、第三に需要者の市場に關

2) Robinson, *ibid.*, p. 82.

3) Beckerath, H. v., *Der moderne Industrialismus*, 1930, S. 126 ff. 参照。

4) Florence, *ibid.*, p. 49-66.

5) Beckerath, a. a. O., S. 213-217.

する知識の缺除、第四に原料品市場の狹隘。順次之を説明しよう。

第一に、需要の分化は今日の商品市場の一特徴である。生産財はさほどでないが、消費財の品質、形状の多種多様なることに至つては驚くべきものがある。米國に於ける調査によれば、一九二二年シヨベル、鋤鉞類は四、

四六〇種（一九二五年三八四種に減ず）、食料品用紙袋は六、二八〇種（同四、七〇〇種に減ず）、研磨盤は七一五、二〇〇種

（同二五五、八〇〇種に減ず）、倉庫業に於ける書類は數千種（同一五種に減ず）の多數に上るが、之は單なる一例に過ぎない。特に消費財に於ける標準化は極めて困難な問題である。多種生産であれば、それだけ一商品の生産量は小となり、大規模なる機械化生産を行ふ餘地は少くなる。又たとひ一つの経営内においてこれらの數種を同時に生産する場合に於ても機械化がそれだけ制限せられることは疑ひない。市場の狹隘も全く同様である。今日に於ては中小工業にも機械使用の範圍は廣くなつて來たが、大機械は勿論、コンヴェーヤー、自働機械の如き機械設備も多くは大規模生産に於て初めて使用し得るものであつて、多種類の生産を行ふ場合においては充分なる効果を發揮し得ない。我國に於て輸出口を除く織物業・食料品工業・陶磁器工業の如き日用品又は嗜好品の製造業に於て著しき實例を見る。又ゴム工業内部に於ても、タイヤ及び地下足袋の均一商品たるに比し、ゴム靴は需要が分化し、ために前者に比してその企業規模が小となつてゐる。

かゝる需要の分化は單に消費者及び生産者の無意識的結果であることもあり、又需要者の趣味嗜好に原因をもつ場合もある。美術的・工藝的・流行風・浪漫的等と呼ばれる商品にあつては屢々中小工業は高級の技術を有し、之に應じて高き價格を以て販賣し得るから、企業の存立は比較的容易である。然し乍ら我國中小工業の大なる部

6) Florence, *ibid.*, p. 25.
7) Beckerath, *a. a. O.*, S. 201.

分は低廉なる勞働と低度の技術を以て立つものであつて、茲に於ては中小工業の大工業に侵蝕される危険が少くないこと後述の如くである。

第二に、需要の不安定が大企業の發展を妨げ、中小工業の競争を可能ならしめる。需要の變動は前述の危険及び變動の要素に屬するものと見ることが出来るが、その中には景氣變動と趣味嗜好から来る需要の變動との兩者を含むから、今その中、後者のみをとり出して便宜上茲に市場問題の一として論ずる。各種の服飾品工業の如きはその最も極端なる例であり、かくの如き場合には單一の商品を目的とする機械は充分なる利用を見ないから使用し得ず、機械化は小部分に止まらざるを得ない。紡績業及び輸南向綿織物業においては商品の一樣にして變動少きに反し、内地向織物業及び各種の服飾品工業は流行の變遷を考慮せざるを得ない。然し需要の不安定は、かくの如き流行商品のみに限らずして、例へば自動車その他の機械類にも屢々見出されるのである。需要の分化せる商品と需要の不安定なる商品とは略範圍を一にするが、かくの如き商品の需要は機械化を妨げ、之による生産費低下の途を塞ぐものであるから、この意味に於て不合理 (unreasonable) なる需要、若くは非論理的 (illogical) なる需要と呼ばれるのである。大規模化を妨げる大なる原因の一はこの非論理性にあるといつてよい。

然し乍ら非論理的需要に非ずして、生産技術の上から市場の狹隘が避け難い場合がある。即ち商品の市場が狭くして、しかも技術的に分業の利益が存するとき、個々の部分品工業がその商品種類の多様なるため、中小規模に止まる場合である。我國における機械器具工業の如きこの一例であり、そこでは大企業が部分品の製造から仕上・組立まで一貫作業によつて行ふことは必ずしも有利でない。部分的には低度の勞働にて足るところもあるか

8) Robinson, *ibid.*, p. 83 et seq., Macgregor, D. H., *Industrial Combination*, p. 64 et seq.,

9) Florence, *ibid.*, p. 57/58; Beckerath, a. a. O., S. 202.

ら、之は中小企業に委ねる方がむしろ低廉となる。しかも大機械に於ては同一製品の生産少く、従つて又注文生産の形をとることが多い。その他の機械に於ては見込生産が行はれるけれども、我國の如く市場の狹隘なる場合に於ては同一製品の數量は比較的少い。かくの如き場合、多種多様な部分品の製造に至つては一層個々の數量が少く、且絶えず種類が異なることとなる。蓋し市場としては先づ國內市場のみを標準とせざるを得ず、外國市場はたとひ獨逸・米國の如く相當の輸出を有する國に於てさへ國內市場と同様の意義を持つことが出来ないからである。かくして機械工業の一部には需要の不合理性に基かざる需要の分化及び不安定が作用して中小工業の存立を許す場合がある。¹⁰⁾

第三には、需要者の市場知識の缺除が考へられねばならぬ。即ち完全なる自由競争の行はれる市場であるならば、買手は市場についてすべての知識を持つてゐる筈である。そこで同一商品につき価格は一つしかないこととなり、高き生産費をもつ中小工業は敗退の外ないであらう。然し乍ら實際の市場はかくの如く完全なるものではない。賣手と買手との間に所謂得意關係を生じて、時には稍高くとも同一賣手の商品を習慣的に購入せんとするものが常である。市場には同一商品につき同時に二つ以上の價格が併存するのみならず、品質・形状・包装等に多少の差異をつけて商品に多様性を附し、價格の平準化を妨げることが多い。廣告・商標等の効果もこゝにある。即ち生産者及び販賣業者の作爲による需要者の不知と然らざる需要者の不知との二つの場合があるが、何れにせよ、市場の中に部分市場を形成することが、中小工業に存立の餘地を與へることとなるのである。

第四に、原料市場の狹隘を擧げねばならぬ。以上三つの事情は何れも製品市場の狹隘に外ならぬが、他方に原

10) 拙稿、中小工業問題としての下請制工業、機械工業に於ける下請制の調査(社會政策時報、第204號)、小宮山琢二、下請工業の社會的經濟的構造(社會政策時報、第216-218號)。

料市場の狹隘も同様の働きをもつ。一般には各地に散在せる原料のうち、交通手段の發達と共に、少數の優秀豐富なる原料資源若くは原料市場のみが開發利用される傾向にあるが、重量・容積の大なるもの、腐敗し易きもの等、運送の困難を伴ふものにあつては原料市場は狭く限られ、従つてそれらを基礎とする工業は中小規模のものに止まることとなる。

こゝに掲げたる如き凡そ四つの市場關係ある場合には、他の事情にして同一なりとすれば大工業よりも寧ろ中小工業の成立を容易にする。即ちかゝる場合には機械化を中心とする大規模生産の利益を實現せんとしても、或は機械利用の不十分から固定費負擔の増大を招くか、或は供給量超過から販賣費の増加を來すか、或は原料蒐集費の増加を來すか、何れかの結果を招き、寧ろ中小規模の生産を有利とするのである。

三

市場の確保といふことは大工業といはず、中小工業といはず、極めて重要な問題であつて、之がためには相當の販賣費の支出をも辭せないのである。交通の發達するとき、又は經濟の發展期に際しては市場は著しく擴大し、その商品の販賣可能性も増大するから、企業の大規模化が比較的容易に行はれる。然し乍ら經濟の趨勢が下降する時期にあり、又新市場の開拓が困難となるに従ひ、既に市場が現在の企業によつて飽和状態にあるから、假令大企業が生産費の低廉を以て中小企業を驅逐せんとしても、必ずしも容易なことではない。即ち現實には部分市場が形成されて居り、僅かなる價格の競争のみを以てしては顧客を奪取することが出來ないからである。大なる販賣費を支出するか、或は價格を著しく切下げることの方法を必要とする。米國に於ける統計によれば、例へ

11) Levy, H., The new industrial system, 1936, p. 66 et seq.

1) Robinson, *ibid.*, p. 120.

2) Florence, *ibid.*, p. 54.

ば食料品において最終販賣價格の中、二〇%が小賣商、九%が卸賣商の口錢にして、一二%が生産者自身の販賣費であつた。英國の實例も亦之と大差なき數字を示したが、以て販賣費の大を知り得るであらう。市場獲得の費用は換言すれば成長の費用³⁾(cost of growth)であり、マーシャルの認める如く、大企業が中小企業を全く驅逐することを妨げる最大の理由の一である。「彼の店が非常に急速な發達を持續するには同一産業内に殆ど並立せぬ二つの條件の存在を必要とする。多くの産業に於ては個人生産者は彼の生産高の増加によつて多大の内部經濟を收め得る。又他の多くの産業に於ては個人生産者はその生産高を容易に販賣し得る。けれども生産者がこの兩者を兼ね得る如き産業は少い。そして之は偶然的結果ではなくして、殆ど必然的結果である。蓋し大規模生産の經濟が第一級の重要性を持つ如き産業の大多數に於ては販賣が困難だからである。……」⁴⁾

然し大企業の絶えざる侵略に對して中小企業は防衛しなければならぬ。市場確保が必要なるは大規模化しつつある企業のみでなく、中小企業も亦同様である。之がため中小工業は廣告・商標・意匠・サービス等によつて顧客を自己の手中につなぎとめて置かねばならない。高級なる技術を必要とする嗜好品の方面に於ては之は比較的容易であるが、我國中小工業のうちかゝる部門の止める範圍は大きくない。需要の分化し又不安定なる商品の生産においては大企業の進出困難にして中小企業の市場確保が比較的容易なることは既に述べた。然し乍らそれらの中にも或る程度機械化を許すが如き場合には、それだけ大工業との競争を豫想せねばならず、市場の問題は重大となる。かくして需要者の不知を利用し、市場を不完全競争の状態とし、一定の顧客によつて部分的な市場を形成することが必要となるのであるが、實は之は決して容易なことではない。今日迄中小工業が商業資本に依

3) Robinson, *ibid.*, p. 120.

4) Marshall, *Principles*, p. 286.

存してゐるのを屢々見るが、かゝる結合の契機は全くこゝに存すると見ることが出来る。

級上の如く中小工業にとつても市場的活動の必要は大きい。市場を開拓し、或は少くとも従来よりの市場を確保して生産の繼續を可能ならしめる事は自己の力のみでは屢々困難であり、商業資本若くは大工業資本の活動に俟たねばならなくなる。殊に一般に市場の擴大し、景氣變動、その他の變動が廣汎且つ激甚となるに従ひ、市況の豫測といふことは極めて重大であるし、又市場の整備せざる場合には少量の原料の買入、製品の貯藏が困難であるから、これらの點でも商業資本に依存しなければならぬ。かくて注文蒐集・原料購入・製品販賣の如き商業的機能の重大さと困難とを考へるとき中小工業の商業資本への依存が殆ど必然的であることを知るであらう。勿論、商業的機能の擔當の反面に、中小工業への壓迫又は危険の轉嫁を行ふ虞が極めて多きことは大なる問題であるが、それ故に商業資本との關聯を切り離して中小工業の存立の途を求めんとすることは當を得たるものではない。我國工業組合は本來中小工業者のみの力を結合し、以て問屋の羈絆を脱せしめ、又市場地位の強化のためにカルテル的統制力を附與せんとしたものであるが、問屋の勢力を全く驅逐することが出来なかつた⁵⁾。又最近中小機械工場が機械商を中心として結合し、工業的機能と商業的機能とを分擔せんとする試みがなされてゐるものこの意味で興味が深い。

マーシャルは生産費節約に内部經濟と外部經濟とを分つた⁶⁾。内部經濟とは能率高き機械の採用、經營組織の合理化の如き、企業内部の改善に因る經濟(生産費節約)であり、外部經濟とは交通機關その他補助産業の發達、熟練勞働の成立、部分市場の形成の如き、個々の企業と直接關係なき、産業の一般的發達に依存する經濟(生産費節約)

5) 小宮山琢二、前掲論文。磯部喜一、中小商工業の組合運動、96頁、118頁参照。

6) Marshall, *ibid.*, p. 267-285.

をいふ。外部經濟は大工業の利益となるのみならず、屢々中小工業の存立を容易ならしめる重大なる要素である。而してこの外部經濟の中には商業の發展に依存する部分が著しく多いことは注意する價值がある。商業の發達による市場機構の整備、それに基く分業と特化、従つて特化機械の使用の如き之である。例へば東京附近及び阪神地方に於ける中小工業の發展は大なる外部經濟に負ふところ多く、北九州における中小工業が比較的おくれであるのは、一は市場その他の點に於ける外部經濟の小なることによるであらう。又英國木綿工業に於ては嘗て極めて有能なる商業が充分なる市場活動によつて工業者を支配し、そこに分業と特化とが發展して、以てその繁榮を誇り得たのであつた。⁷⁾ 分業及び特化は商業によつて全生産が綜合されることによつて可能となり、又特化せる中小企業は商業的機能より開放されて技術的進歩に専念し得ることとなつた（にも拘らず、商業者の支配が、後に工業者の技術的改良への關心を稀薄にしたことが指摘されるが⁸⁾）。

かくの如くして中小工業が市場的活動の重要部分を商業に依存する經營組織は中小工業の存立に大なる支持を與へ、否むしろ之なくしては中小工業は屢々没落せざるを得ないのである。然し乍ら中小工業の商業資本への依存は更に他の意義をも有する。經營上の援助及び資本的援助之である。

經營管理上の點からいへば、一般には小企業の方が有利である。即ち大規模化するほど監督が企業の各部分に徹底せず、又敏速なる處置をとり得ず、従つて經營の各部の連絡統合のために多くの人員と費用とを要する⁹⁾。

中小企業はこの點に於て長所を有する。然し乍ら中小工業にあつては經營者の才能が必ずしも優秀でない。マシヤルは大企業の經營者必ずしも常に有能ならず、中小企業の經營者に屢々有能なる者を得ることよりして、企

- 7) Landauer, E., Handel und Produktion in der Baumwollindustrie, 1912; Beckerath, a. a. O., S. 194.
8) Beckerath, a. a. O.
9) Robinson, ibid., p. 44-48.

業の隆替(機會の均等)を論ずる optimistic な見解を示してゐる。¹⁰⁾ 中小企業にして有能なる經營者を得たるときは、その成長の可能性は決して少くない。然し今日の社會經濟状態においては、中小企業が有能なる經營者を得ることが先づ容易でない。中小企業の經營者は概ね單なる技術者に止まり、商業的知識に缺くところ多きのみならず、經營的才能に於ても十分といへないことが多い。實に中小工業者の知識の缺除は中小工業に於ける重要な問題の一である。かくて例へば需要に應じて生産の計畫を立て、又經營の組織化を行ふ如きことは之を屢々商業資本の援助に俟たねばならないのである。

中小工業には機械化を行ふべき部分の少きこと周知の如くであるが、單純なる加工を行ふ場合は勿論、工藝的なる技術を必要とする場合にあつても、今日中小工業に機械化を行ふ餘地は相當に廣くなつてゐる。農村家内工業より、完全勞働と工場内の機械とを利用する今日の中小工場工業(「新問屋制工業」¹¹⁾)への進展においても機械化の前進を知る。機械化は固定資本の増大を意味し、屢々之に伴ひ流動資本も多額となる。かくして資本の必要は益々大となるが、中小工業金融は未だ充分なる發展を示してゐない。例へば我國においても預金部資金の融通制度¹²⁾があるけれども、今ほ最も多數の利用を見てゐるのは問屋金融と個人金貸業者よりの融通である。問屋は商業的支配及び經營上の干涉によつて企業の内情を知悉してゐるから、容易に簡便に融通し得るのである。唯然し金融を武器として中小工業を壓迫することが屢々行はれることは中小工業にとつて甚だ困難なる問題であつて、問屋資本を排除し、組合制度による中小工業の更生を圖らんとする見解の如きはこの點からも主張される。

商業資本に依存する中小工業は問屋制工業と呼ばれるが、工業資本に依存するものは下請制工業である。下請

10) Marshall, *ibid.*, 297-313.

11) 小宮山琢二、前掲論文。

12) 岡庭博、戦時下の中小商工業金融論参照。

制工業の行はれてゐる工業部門は問屋制工業に比して狭く、最近機械器具工業において最も典型的な發展を見てもゐるものである。¹³⁾ 今、機械器具工業を例として論ずれば、下請制工業は大機械工業の補助工業的地位を占めるものであつて、大機械工場の必要とする簡單なる部分品の製造及び簡單なる加工を行ふのである。かくて同じ機械工業部門の中に於ける大工業と中小工業との併存が見られるのであるが、然し下請が行はれてゐる限り、前者の製品は精密なる、或は容積大なる加工及び完成せる大機械であるから、嚴密に言ふならば、兩者は同一商品を製造するものに非ず、従つて同一産業部門に屬せざるものと見ることも出来る。而して大企業は中小企業の製品の購買者であり、大體において兩者の關係は繼續的であるから、中小工業は大企業によつて市場を與へられ、自ら市場活動を行ふ必要を大部分免れてゐるのである。即ち問屋制工業に於ける商業資本に代り、こゝでは工業資本が同じ問題を解決してゐるのである。時によつて經營及び資金融通の點に於ても工業資本が干涉又は援助してゐること同様である。

問屋制工業にて商業資本に依存する場合においても、景氣變動より來る危険は中小工業に轉嫁せられることが少くないが、下請制工業において工業資本に依存せる場合には、屢々中小工業の危険は一層大となる。即ち景氣下降・沈滞期において注文減少せるとき、問屋は工業者へ出す注文を之に應じて減ずるであらうが、下請制の場合には中小工業へ出す注文は減少の度が更に激しいと考へられるのである。蓋し中小工業への發注者たる大工業はそれ自身製作設備を有する工場であり、場合によつては中小工業と同製品につき競争關係に立ち得る。好景氣にはなるべく多くを下請に出し、不景氣にはなるべく多くを自工場にて製作せんとするからである。機械工業に

13) 前掲拙稿參照。

おける大企業の如く大なる固定資本を擁するものは設備を遊ばせる苦痛が甚しいが故に、中小工業の犠牲に於て自己の工場の操業を安定に保たんとすることは自明のところであらう。自己の工場にて、従来下請せしめてゐた部分品の加工製作まで行ふならば、それだけ中小工業の注文は減じ、景氣變動による打撃は大である。

四

工業企業の大規模化を抑制する要素として普通に擧げられるものは經營費の増大と市場獲得の困難とである。企業の擴大と共に經營が困難となり、經營費の増加することに大規模化の限界を求むるのは、例へばシュヴァイードランド、タウシツグ等¹⁾であり、市場獲得の困難に重きを置くのは、例へばマーシヤル等²⁾である。然し前者の如く經營費増大を重視するものが、大企業といふのは米國に於ける如き巨大企業にして、後者が英國の事實について考へてゐるのは少しく規模が異なるやうである。それは兎も角として大企業の成長を妨げるこれらの要因よりして中小工業の存立の餘地が説明されることは明かである。中小工業の存立の條件として市場の問題を取上げる理由は茲にある。

然らば中小工業の成立を容易ならしめる市場は如何なるものであるか。上述の考察より明かなる如く、需要量の小なる市場及び原料市場の小なる場合が之であり、例へば第一に需要の分化してゐる場合、第二に需要が不安定にして變動多き場合には、大規模生産の利益殊に生産技術上の利益を實現し得ない。第三に需要者の知識不足のために生産者及び販賣業者が種々なる方法を以て顧客を自己のためにつなぎとめ、部分市場を形成すること容易なる場合もある。需要の分化及び變動は概ね需要者の非論理的なる性向に基くものであるが、商品によつては

- 1) Shwiedland, E., Der Wettkampf der gewerblichen Betriebsformen.(G. d. S., Abt. IV, S. 49); Taussig, F. W., Principles of economics, 3rd ed., 1922, Vol. I, p. 54-58.
- 2) Marshall, ibid.

生産技術的理由に因る場合もある。勿論、需要者の市場知識不足するときには生産者が需要の非論理性を左右する餘地がそれだけ大きいわけである。第四に原料市場の狭小なる場合はいふ迄もない。

かくの如き市場關係あるときには、しかもそれが甚しい場合にはそれだけ、中小工業の存立は容易なわけである。嗜好品・流行品工業等において中小工業が壓倒的なることは之から説明される。然し乍らこれらの事情にしてさして著しくない場合には中小工業は或る程度大工業と競争關係に立たねばならぬ。

交通機關の發達と共に市場は次第に廣大となりつゝある。他方、機械化が次第に中小工業に及び且特殊専門機械が普及することを考へれば、市場狭き工業に於ても大企業の成立し得る領域が廣まつてゆく傾向にある。こゝに於て市場獲得乃至確保の問題は大工業にとつて重大であると同様に、中小工業にとつても極めて重大なことである。中小生産者としては一層部分市場の形成に努力するか、市場的活動において商業資本若くは工業資本に依存するか、むしろ多くはその兩手段によらねばならないのである。中小工業が問屋制、若くは下請制においてその存立の支持を得てゐることは市場的活動の重大なることより疑ふべくもないが、更に中小工業經營者の才能の不足及び資本の不足が更にその依存を強める。

以上を以て結論すれば、中小工業の存立は市場の不完全と、商業資本又は工業資本への依存とによつて初めて可能なりといつても多くの場合過言でないのである。然らば獨立自營し得ざるものは、中小工業として没落してゐるものと見るべきであらうか。没落せるものに非ずとすれば、今後なほ存在を續け得るや否や、最後にこの點に少しく論及したい。

第一に、他の事情に變化なくして、從屬關係から中小工業が没落する可能性は大であるか。中小工業が商業資

本及び工業資本に依存してゐる場合には、これら大資本は中小工業に對し製品價格又は加工賃を切下げんとし、又景氣變動その他の變動より來る危険の一部又は大部分を轉嫁せんとする。價格及び加工賃の切下げによる壓迫は、たとひ中小工業を破滅させないとしても、疲弊せしめる。況んや景氣變動等の危険が轉嫁せられるときは中小工業は屢々破綻する。多數の中小工業が破滅するけれども、これらは再び整理されて他の經營者によつて生産に参加する。この整理過程による中小企業の存續力は注意する必要がある。一時、景氣の沈滯期には中小企業の破滅が多いが、回復期に向へば、その成立の餘地ある部門には再び多數の企業が現れるのである。下請制工業においては、景氣沈滯期には大工業が中小工業と全面的競争の立場に立つからして中小工業のうける打撃は殊に大であると考えられるが、こゝでも市況の回復と共に彼等は再び現れ出るであらう。かくして浮沈極りまなしとしても、從屬關係から直ちに中小工業の没落を推論することは出来ないであらう。

第二に、中小工業の存立を容易ならしめた要素の變化が問題となる。即ち生産技術の進歩及び市場の變化が中小工業の存立を困難ならしめることがないか。生産技術の進歩にして著しいときは需要の分化し不安定なる商品についても機械化の可能性ひらけ、それだけ大企業の進出し得る領域が大となる。殊に多角的經營の一般化する場合にこの可能性が大きい。市場に需要の非論理性が少くなり、商品の標準化が行はれるならば、市場機構も整備して生産が大規模化する。

中小工業存立の可能性に關する以上の所論を要約すれば、中小工業の今日存立してゐる如き工業部門においてはその市場關係よりして、その存立の可能性は相當大なるものがあるが、將來について見れば、市場の變化及び生産技術の進歩によつて次第にその存立し得る領域が狹隘化してゆくことは否み難いであらう。